

確定条件を表す「と」と「一たら」

金 恩 希

0、はじめに

一般的に「と」と「一たら」による接続文の用法は後行節の時制が非完了（一る）か完了（一た）かによって分けられる。一般に非完了の場合は条件（if）を、完了の場合は時間関係（when）を表す。時間関係を表すものに対して、ここでは松下（1928）の単純偶然確定という命名にちなんで、確定条件という用語を使うことにする。確定条件とは先行節によって引き出される後行節が偶然的な要素を持ち、その事実・事柄がどのような事情や場合のもとで起こったかをまず示し、その事実・事柄がただ後続するという展開形式である（注1）。蓮沼（1993）は「事実的な用法」として使われる「と」と「一たら」について、「新たに成立した状況において話し手が新たな事態を認識する」という関係を表すものと説明しているが、結局同様の主旨であろう。すなわち、「と」と「一たら」が表す確定条件を簡単に言うと、「先行節がすでに過去において起こったことを表し、後行節がそれとの一回的な関係を持つ事柄を表す」ものである。このように「と」と「一たら」が同じく確定条件を表すとは言え、それぞれ特有の性格をもっている。確定条件を表す「と」については先駆的な先行研究が多くあるが、確定条件を表す「一たら」についてのものは少ない。ここでは確定条件を表す「と」と「一たら」の重なり合う用法と独自の用法を明らかにした上で、「一たら」の特有機能について考えてみる。

1、確定条件「と」の下位分類と「一たら」との交換性

確定条件「と」の時間関係には、先行節と後行節の事態が順に発生する場合と、先行節の事態が発生した時点ですでに後行節の事態が続いているか同時に成立する場合がある。前者を継起関係とすると、後者は非継起関係である。継起関係とは先行節の動作・作用が起こったあと、続いて後行節に表される動作・作用が起こるという時間的な前後関係を表す接続表現である。継起関係は同一主語によるものと異主語によるものがある。非継起関係は動作・作用が続けて起こるのではなく、一方の節は動作を、もう一方の節は状態を表

すものである。それには「発見」を表すものと「時」を設定するものがある。

1、1 継起関係

同一主語による継起関係を表す両節の二つの動作は同一人物によって順次的に行われるものである。その動詞はそれぞれの表す二つの動詞が区切られていなければならない。そのためには、動作が始動や方向を表すか、それが具体的な動作を示さなければならない。

(1) 私はもう一度寝返りに打ってふとんを[かぶると／＊かぶったら]、蛙のように腹這いになった。

(2) 僕は紐をしっかりと締め[付けると／＊付けたら]、半白の頭髪を短くそった死者の小さい顔を見た。

(3) 長い電話をかけ[終わると／＊終わったら]、津上は先に立って部屋を出た。

(4) 受話器を耳に[あてると／＊あてたら]、大声でしゃべり始めた。

(5) 広場を[横切ると／横切ったら]、警官に止められた。

(6) 公園に[行くと／行ったら]、年寄りたちが見えた。

(5)・(6)の後行節は動作ではないが、先行節の主体にとっての出来事であるので、同一主語による継起関係と考えられる。このように後行節の述語が[－volitional]の場合は「と」と「一たら」両方用いられが、後行節が[＋volitional]の述語の場合は(1)～(4)のように「一たら」が用いられない。従って、後者の場合、「一たら」は同一主語による意図的な継起関係を表すことができないと言えよう。一方、同一主語による意図的な継起関係は「と」の独自の用法である。

(7) 眼をひからせて向こうの方に飛んで行ったかと[思うと／思ったら]、しよいこのつかえを持って来た。

(8) 一度ふりい立ってパッととびあがったかと[思うと／思ったら]、つめで相手の目をかきおろし、とさかをつつついた。

(7)・(8)の「一たかと思うと」は「一たら」に置き換えることができる。命題の両節は同一人物によって行われているが、「思う」の主体は話し手なので、両節の主語は同一ではないことになる。

(9) 信号が[変わると／変わったら]、車は一斉に走り出した。

(10) 米を輸入[すると／したら]、国産米の値段がさがった。

- (14) 駅の階段を駆け[上がると／？上がったら]、電車の扉がしまった。

異主語による継起関係は統語的に「と」と「一たら」は置き換えることができる。しかし、「一たら」には因果性（一般に原因から結果、もしくは結果から原因が推論できるもの）が存在するように思われる。(9)～(12)の「と」文は単なる時間関係を表すが、「一たら」文には文脈的に因果性が窺える。逆に言うと、(9)～(12)では一般に両節の命題間に因果関係があると推論することが可能なのである。これに対して、(13)・(14)のように両節のあいだに何の因果性もなく、後行節への働きかけもない場合は「一たら」では不自然な文になる。もし、話し手が両節のあいだには因果性があるように発話するか、聞き手が因果性を発見することができるものであれば不自然ではない。これは一般的に言われているような「一たら」の主観的で理屈っぽい性格に基因するものと思われる。反面、「と」は蓮沼(1993)の仮説を借りて説明すると、「話し手が外部からの観察者の視点で語る」性格を持っている(注2)。

異主語による継起関係は即時的であっても漸次的であっても、後行節が発生した時点では先行節はすでに完了している。この継起関係を「と」と「一たら」が両方表すとは言っても、形態的に「と」は現在形、「一たら」は完了形になっており、「一たら」には完結性(perfectivity)が窺える。完結性は完成した動作として性格づけられるが、短い期間の時間で、点的な(punctual)場面をさししめす(注3)。すなわち、「と」は先行節をひとつの過程(process)としてとらえるが、「一たら」はひとつの出来事(event)としてとらえるように思われる。ここで過程とは不完結的な動的場面を意味し、出来事は完結的な動的場面を意味する。

「と」： 信号が変わると、車は一斉に走り出した
process

「一たら」： 信号が変わったら、車は一斉に走り出した
event

1、2 非繼起關係

非継起関係を表すものには後行節にある物や事の状態が述べられ、それが先行節による発見であるものと、先行節が後行節の事態が発生した時間を設定するものがある。従来の

用語を借りて前者を「発見」、後者を「時」とする。「発見」は後行節が状態を表し、「時」は先行節が状態（一ている）を表す（注4）。

(15) ～ (18) は「発見」に該当するが、「一たら」も「と」と同じく先行節の主体に後行節の事態が目についたということを表す。

(15) 右へは行って [行くと／行ったら]、ぶらんこがあった。

(16) ふり [むくと／むいたら]、戸口にアレクサンドル・キャバンヌが立っていた。

(17) よく [見ると／見たら]、その向こうの杉林の前には、数知れぬ蜻蛉の群が流れていた。

(18) 管理人室に戻って [来ると／来たら]、病院の制服を来た雑役夫が二人来てい、長椅子に腰かけて煙草を喫んでいた。

このような「と」と「一たら」について鈴木 (1994) は、両者は前後間の関係の認識に差があるとし、「『と』は話し手は現在の時点から、過去にあった関係認定について述べるもので、『一たら』は現在から過去の事態を振り返って二つの事態の関係を認定するものである」と述べている。これを発話の場面と事件の場面の関係で言い換えれば、「と」は発話の場面と事件の場面（両節）を同一視し、「一たら」は同一視しないことになる。すなわち、「と」は現在（発話時）の視点で過去の事態の関係を言い、「一たら」は現在の視点から事態の起きた時点へ視点の移し回想する。「と」は後行節が完了した（発見した）時点に視点をおくので、場面が一つであるが、「一たら」は両節に視点をおき、両節を振り返ってみるので、二つの場面が必要ということになる。「一たら」の持つ二つの場面は事件の場面と事件を回想する発話の場面である。

「と」： [右へは行って行くと、ぶらんこがあった] 発話の視点
発話の場面 →

「一たら」： [右へは行って行ったら]、[ぶらんこがあった] 発話の視点
発話の場面 →

(15') 右へは行って行くと、ぶらんこが見えた。
process

(15'') 右へは行って行ったら、ぶらんこが見えた。
event

(15) のような非継起関係は (15') ・ (15'') のように同一主語による継起関係で言い換えられる。

- (19) そこの内湯につかって [いると／いたら]、あとから男が入ってきた。
 (20) 本を読んで [いると／いたら]、雨が降り始めた。
 (21) 電車で寝て [*いると／いたら]、サイフをすられてしまった。(鈴木1994)
 (21') 電車で寝て [いると／いたら]、サイフをすられた。
 (22) 本を読んで [いると／いたら]、眠たくなってきた。(鈴木1986)

先行節が後行節の発生の時間的な状況を表す「時」は「と」も「一たら」も表すことができる。これは「一ている時」に置き換えることができる。ただし、「一時」に置き換えられればすべて「時」を表すというわけではない。「広場を[横切ると／横切ったら]、警官に止められた」の場合は「一た時」に置き換えることができるが、両節のあいだには継起関係が存在するので、「時」には該当しない。つまり、「一ている時」に置き換えられるものは「時」を表し、「一た時」に置き換えられるものは「継起関係」を表す。

「と」は(21)において「一たら」のように後行節の主体が自分で体験した事態の時間を自分で設定することができないように見える。しかし、(21')と(22)の「と」はそれほど不自然に感じない。この現象からみて(21)において「と」が不自然になるのは、「と」が自分が自分で時間を設定することができないのではなく、「と」は客観的な時間関係を表すので、話し手の主観(一てしまった)を表しにくいからだと思われる。

以上をまとめると、次のようになる。

確定条件	継起関係		非継起関係	
	同一主語	異主語	発見	時
と	○	○	○	○
一たら	○*	○	○	○

(*は後行節の述語が [-volitional] の場合)

2、「一たら」だけが表す確定条件

- (23) 夜に [なると／なったら]、急に冷え込んだ。
 (24) 妻が出て [行くと／行ったら]、あとが静かになった。
 (25) 私は本をたくさん [*読むと／読んだら]、目が悪くなってしまった。
 (26) 私は梨を [*食べると／食べたら]、便秘が治った。
 (27) 毛のセーターを洗濯機で [*洗うと／洗ったら]、着られなくなった。(蓮沼1993)

(23)～(27)の後行節は先行節の結果として現れている。いずれも偶然的な結果であって、必然的なものではない。しかし、(25)～(27)のように話し手の体験的な結果を

表す場合は「と」は用いられない。これらは同一主語によるもので、両節のあいだには時間関係も存在するが、「一たら」が用いられている（注5）。この「一たら」は後行節の述語が[－volitional]の同一主語による継起関係に該当する。このように話し手の体験的な結果を表す「一たら」文は「ので」に置き換えることができる。「一たら」が「ので」に置き換えられることは因果性を持っていることである。ただし、その因果性は全く話し手の主観によるものである。「一たら」文の両節のあいだに存在する因果関係は外部から観察できないもので文脈的、かつ因果関係の原因と結果は非意図的で非明示的である。

(25') 本をたくさん読むと、すぐ目が悪くなってしまった。

(26') 梨を食べると、すぐ便秘が治った。

(27') 毛のセーターを洗濯機で洗うと、すぐ着られなくなった。

「と」は時間関係を客観的に述べるのを本来の用法としているので、因果性が存在する(25)～(26)では用いられない。しかし、「私は」をとり、両節のあいだに「すぐ、急に、しばらくしてから」のような時間副詞を挿入すると、(25')～(26')のように「と」で接続することができる。つまり、時間副詞の挿入により因果性が薄くなってしまい、時間関係が表面に出るのである。「一たら」が表す時間関係は原因が結果に先立って成立する点での時間関係である。

「一たら」の後行節が表す結果は蓮沼(1993)の言うように外部から客観的に観察できるものではない。先行節を体験することによって後行節の結果が得られるので、後行節が完了した時点で知覚(判断)できるものである。このような「一たら」は表面的には時間的な接続機能を持ち、内面的には因果的な接続機能を持っている。

(28) 友達からもらったリンゴを[*食べると／食べたら]、まずかった。

(29) 山田先生に会いに[*行くと／行ったら]、とても優しい先生だった。

(30) あの本を[*読むと／読んだら]、面白かった。

(28)～(30)の後行節は先行節を実際に行った結果ではあるが、全面的に因果関係を表すのではない。両節のあいだに因果性が存在しないので、「ので」に置き換えられない。外部からは観察できない結果が現れるので、観察できない「発見」とも言える。このような「一たら」には先行節が状況を提示、もしくは前提的な役割をし、後行節は先行節で提示された状況をもとにした変化や状態を叙述する点から説明的(注釈的)な機能が窺える。

「説明的」と言うのは話し手が直接経験した事態・状態を説明するという意味と付加的な説明の意味を含む。(28)～(30)は次のように言い換えることができる。

(28') 友達からもらったリングはまずかった。

(29') 山田先生はとても優しい先生だった。

(30') あの本は面白かった。

「一たら」は先行節には話し手が直接体験したことを述べ、後行節にはその体験を通じて知覚した内容が述べられる。それが外部からは観察できないものであるから、話し手（体験者）の説明が必要となるものと考えられる。このような「一たら」文は時間的な接続機能と説明的な接続機能を持っている。

3. おわりに

確定条件には両節が継起的に発生するものと非継起的に発生するものがある。これらは「と」と「一たら」の共通の用法である。両節が同一主語による継起関係で、後行節の述語が[－volitional]の場合は「と」と「一たら」で表すことができるが、[+volitional]の場合は「と」だけが使われる。同一主語による意図的な継起関係は「と」の独自の用法である。異主語による継起関係は「と」も「一たら」も表すことができるが、「一たら」には両節のあいだに因果性を持たす機能が窺える。これが「と」との相違点である。また、「と」は先行節をひとつの過程（process）としてとらえるが、「一たら」は出来事（event）としてとらえるように思われる。

同一主語による継起関係で後行節の述語が[－volitional]のうち、両節のあいだに因果性が存在する場合は「一たら」だけが用いられる。このような「一たら」文は話し手の体験的な因果関係を表すので、「ので」に置き換えることができる。その結果は偶然的な結果であって、必然的なものではない。従って、その因果関係は非意図的で非明示的なものである。「一たら」が表す因果性は内面的な機能であって、表面的には「と」と同じく時間関係を表す。また、因果性のない「一たら」文には説明的な機能が窺える。後行節はすでに接続の事態を含意しているが、それをひとつの事態として提示する注釈的な役割である。

以上の考察を整理すると、「一たら」は時間的な前後関係の接続機能と共に、因果的な接続機能と説明的な接続機能を持っていると思われる。因果的な機能と説明的な機能を持つ「一たら」文は「と」と置き換えられない。

(注)

1) 森田良行（『日本語学と日本語教育』、アルク（1990:95））の「と」の用法の中で

「連接」に関する説明であるが、本稿で取り上げる「一たら」の用法にもそのまま当てはまると考えられる。

- 2) 蓮沼 (1993) は「事実的な『と』は前件の事態が成立した状況における、後件の事態の成立、あるいはそれに対する認識の成立を、話し手が外部からの観察者の視点で語るような場合に使われる」のような仮説を提示したことがある。
- 3) COMRIE, BERNARD (山田小枝 (訳) 1988:81) 参照。
- 4) 筆者が分類した「非継起関係」は鈴木 (1986) のいう「前句内視点型」に近いものである。それを「会場に入ると、中には既に大勢の人が集まっていた」のような「発見」と、「本を読んでいると、眠たくなってきた」のような「発現」に分けているが、「発現」の例文は本稿の「時」に当たるものである。
- 5) このような「一たら」について蓮沼 (1993) は「事実的な『一たら』は、前件の事態が成立した状況において、後件の事態を話し手が実体験的に認識するといった関係を表す場合に使用される」のような仮説を提示した。

<参考文献>

- 鈴木義和 (1986) 「接続助詞『と』の意味と用法」『国文論叢』13、神戸大学
—— (1994) 「一バ／ト／タラ／ナラ」『日本語学』13-8、明治書院
- 戸村佳代 (1988) 「条件を表さない『たら』について」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』3
- 豊田豊子 (1977～1987) 「接続助詞『と』の用法と機能 (I) ～ (V)」『日本語学校論文集』5,6,9,10号、『日本語教育』36号
- 蓮沼昭子 (1993) 「『たら』と『と』の事実的用法をめぐって」『日本語の条件表現』くろしお出版
- 林四郎 (1989) 「『と』『たら』型条件文の構造と表現のレベルの変換」『明海大学外国語学部論集』1
- COMRIE, BERNARD (1976)、ASPECT, Cambridge UP. 山田小枝 (訳) (1988)、むぎ書房